

ナチュラルキス  
～新婚編2～

## C o n t e n t s

ナチュラルキス～新婚編～2      5

啓史 side      241

ナチュラルキス  
～新婚編2～

1 ひさしぶりの感じ

あたふたと朝の支度を終え、後部座席に乗り込んだ佐原沙帆子は、車が走り出しようやく息を吐いた。

車を運転しているのは、彼女の夫の啓史だ。彼は沙帆子の副担任でもある。

ふたりは四日前、つまり三月十日に結婚したばかり。

あーあ、今朝もまた佐原先生に起こされちゃった……

彼の寝顔を眺めて甘い朝を迎えるなんて日が、この先、果たして訪れるのだろうか？

わたしってば、どうしてもっと早く起きられないかなあ？

はあ。

がっかりのため息をつき、沙帆子はでっかいうさぎのぬいぐるみに顔を埋めた。このぬいぐるみは、啓史の友人である飯沢敦——彼は沙帆子の親友、千里の従兄でもある——から結婚祝いにもらった。

沙帆子はこの子のことを、でかうさと呼んでいる。彼女はでかうさを気に入っているのだが、啓史は、どういう理由か定かではないのだが、このでかうさが物凄く気に入らないらしい。

車のトランクの奥に押し込まれたままだったのを、沙帆子はなんとか助けてやりたくて、クッション代わりに使いたいと提案したのだ。それが叶い、いまはこの後部座席がでかうさの居場所になっている。

それにしても昨夜は驚かされた。啓史の友人である深野というひとが突然マンションにやって来たのだ。

啓史が結婚したことは彼にも内緒のため、沙帆子はずっとキッチンに隠れていた。でも、ふたりの会話は聞こえていて……おかげで沙帆子は、色々と知ることができた。

学校で啓史の結婚相手だとの噂が広まった白井百合子の恋人が、実は深野だったこと。そして、白井は元々啓史のことを好きだったことまで聞いてしまった。その話に、一瞬どきりとしたけど、深野の言葉を聞く限り、啓史と白井の間で何かあったなんてことはないらしい。

それを聞いてほっとしたのだが……そのとき、啓史の口から飛び出た『合コンの二の舞』という言葉が、心に引っかかって……

そのことを聞きたかったんだけどなあ。

ま、まあ……その……色々あって……いつの間にやら朝になっていたわけで……

昨夜の『色々』がボンボンと頭に浮かび、沙帆子は「ぎゃっ」と叫んでしまう。

「どうしたんだ？」

沙帆子の叫びに驚いたらしく、啓史が問いかけてきた。

「いいえ。な、なんでも」

しどろもどろになつて答える。

「なんでもないのに、叫んだりしないだろう？」

啓史は苛立つているようだ。沙帆子の様子になるのに、運転しているため後ろを確認できないからだろう。

「ほんとになんでもないんです」

なんと言つて誤魔化そうかと困つていると、いいタイミングで沙帆子の携帯が鳴り出した。

「あ、メールがきたみたいです」

天の助けとばかりに、沙帆子は携帯を取り出して開く。

千里からだつた。今日の昼、いつもの喫茶店でランチを一緒に食べないかという内容だ。

これからしばらくは午前授業が続く。今日の午後は期末テストで赤点を取った生徒の追試が行われることになつていて、明日からは、三者面談会が四日に分けて行われる。沙帆子は初日の三番目、つまり明日だ。ちなみに千里と詩織は、一番目と二番目。もちろん三人で話して時間を合わせた。

「先生、千里から、今日のお昼、喫茶店でランチを食べないかって……」

「ふーん、どこの喫茶店だ？」

その反応からすると、了解つてことのようにだ。

沙帆子は喫茶店の場所と名前を啓史に伝え、千里に返信した。

三人でランチか。楽しみだな。

それじゃあ……今日はランチを食べつつふたりとおしゃべりして、そのあと、自力で佐原先生の

マンションに帰ろう。そしたら、やりたかつた荷物の整理もできるし……

何をおいても、まずは手に入れた佐原先生の写真の移動だよ。

実は、披露宴のスライドショーで使われた写真を、啓史に内緒でスタッフからもらい、バスケットに入れて持ち帰ってきたのだ。写真は、啓史の誕生から、徐々に成長する姿が写されたもので、沙帆子にとつてはとんでもなく価値のあるお宝だ。けれど、啓史に見つかつたら取り上げられてしまうに決まつている。そんなわけで、彼には内緒で安全な場所に移動させたいのだ。一度取り出すとしたのだが、バスケットの鍵を探しているうちに、啓史がやつて来てしまつて、そのままになつている。

先に帰つて、やりたいことを全部片付けてえ。

それで、それで、昨日佐原先生からもらったパソコンを開いてえ。

千里から受け取つた結婚式の写真を満足するまで眺めるのだ。

にやにやしながら画策していた沙帆子だが、学校から啓史のマンションまでの道順を知らないことに気づいた。

電車やバスを使つて帰る場合、いったいどの駅で降りればいいんだろう？ あの近くに駅つてあつたっけ？ 佐原先生に、教えてもらつとかなきや。あつ、そうだ。鍵も借りないと……、帰り着いても、家に入れないよね。

「先生」

「うん？」

「先生の家から、一番近い駅ってどこですか？ 近いんですか？」  
「なんで？」

「なんでって……今日は午前中だけだし、千里たちと話したら、ひとりで先に帰るつもりでいるんですけど」

「あそこは駅が遠いし……電車やバスを使ったことがないから、俺もわからない。飯沢たちと別れたら、学校に戻ってこい」

「戻ったほうがいいですか？」

せつかくの計画がおじやんになり、ちよつとがっかりだ。

「ああ。そのほうがいい。五時くらいには戻って来られるよな？」

「はい」

まあいいか。実物を、こうして身近で眺めていられるんだし、写真はまた、次のチャンスを待つでしょう。

「あー、なんか、この感じ、ひっさしぶりだねえ」

感慨を込めて詩織が言う。沙帆子は同感して大きく頷いた。

午前中の授業を終え、千里と詩織、沙帆子の三人で下校しているところだ。

「こうしていると……沙帆子が……だなんて、冗談みたいだよ」

詩織は口に出せない部分に間を空け、意味深に言う。佐原先生と結婚したなんて、と続けたかっ

たのだろうが、それを口にするのは危険なことだけに、そんな言い方になってしまったのだろう。すると千里も口を開く。

「わたしも、朝、目が覚めるたびに、夢じゃないかって思うわ」

沙帆子も同じようなものだ。ただ、毎朝啓史に起こされているので、夢と思う暇はない。

目を覚ますたびに、『ああ、わたし、佐原先生と結婚したんだ』って、実感する。

……けど、佐原先生から離れてしまうと、途端にその実感も薄まっちゃうんだよね。

いまま、仲良しの友達ふたりと制服姿で一緒に行動していると、すべてがなかったような思いに囚われてしまう。

目的の店に着いた。学校の帰りによく寄っている喫茶店だ。このメニューはなんでも美味しいので、彼女たちのお気に入りなのだ。

窓側に空いている席があった。沙帆子は千里と並んで座り、向かい合わせて詩織が座る。

前回ここに来たのは、結婚式の前で……あのときは、ふたりにたんまり奢らされたっけ……

そ、そっか。あれはつい先週の月曜日のことなんだ。

思わず驚きとともに瞬きしてしまう。

……考えたら、あれからまだ、十日も経っていないんだ。なのに、ずいぶん前のことみたいに思えてならない。

「あんときも、全然受け入れられないでいたけどさ……いままあんま変わらないよ」

運ばれてきたエビピラフを前にした詩織は、そう言ってくすくす笑い、スプーンを持ち上げた。

千里はドリア、沙帆子はオムライスだ。

「同感。けど、現実なんだからね」

熱いドリアをフォークでつつきながら、千里は文句を言いたそうに、隣に座っている沙帆子にしかめた顔を向けてきた。

「なんか……言いたいことはいっぱいあるのに、ここんところつかえちゃってるわ」

千里は自分の喉元のどもとを指さし、さらに渋い顔をする。

「あの、ごめんね」

なんとなく謝らなきゃならない気分になり、沙帆子は頭を下げた。

頭を上げた瞬間、千里に額ひたいをパチンと弾はじかれた。

「いたっ!」

千里は痛がっている沙帆子の顔をじろじろ見る。

「な、何?」

「ちつとも変わらないのに」

不機嫌そうに睨にらまれて、沙帆子は戸惑った。

「え、えつと……」

突然、千里は沙帆子に向けて、ぐいっと顔を突き出してきた。勢いに押されて、沙帆子は横に身を引く。

「ねえ、あんたさ?」

「う、うん、なあに?」

千里は何か言いかけて、いったん口を閉じ、改めて口を開いた。

「週末、うちに遊びに来れないよね?」

「へっ? 千里の家?」

「うん。どう?」

「週末は……無理かも」

そう答えると、千里は「だよね」と言う。

「ご両親の引っ越しもあるわけだし、手伝いしなきゃならないよね。引っ越しは来週の土曜日だもんね」

「う、うん」

額うなじいたものの、沙帆子は両親の引っ越しが目前に迫っていることを改めて気づかされて、落ち着かない気分になった。

明日から引っ越しまでは、両親の家で夕食を食べることになっているけど、引っ越ししてしまったら、両親とはたまにしか会えなくなるのだ。

もちろんすでに覚悟はしていた。結婚という話になる前だって、ひとりでごっちに残してもらいたいと望んだくらいだ。

そうは思っても、両親と会えなくなる寂しさを感じずにはいられない。

「それじゃ、まあ、四月になって、あんたが色々な面で落ち着いてからだね」

沙帆子は頷いた。

それまで話を聞いているだけだった詩織が、意味ありげな顔をして、ふたりに問いかけてくる。

「けどさ、啓ちゃん、許すかなあ？」

「大丈夫なんじゃない。あっさりオッケーしてくれそうだけど」

千里の返事に、詩織は不服そうに「そうかな？」と言う。

「クールなひただもの。たまにはひとりでもいいってタイプだよ」

千里の自信ありげな発言に、沙帆子も思わず頷いてしまった。

確かに千里の言う通りかも……なら、わたしのほうで配慮して、先生がひとりになれる時間をとくべきなのかな？

「そんなことないと思うけどなあ」

詩織が強く反論する。

「恋人とべったりってタイプに見えるっての？」

「そう言われると……あれだけさ」

「沙帆子、あんたから見ても、どう？」

千里に聞かれ、沙帆子は口ごもる。

「う、うん……よく、わかんない」

「あのねえ、啓ちゃんは、絶対情熱的だよ。沙帆子とべったり一緒にいたいじゃ決まってるの」  
詩織にそんなふうにも言ってもらえ、沙帆子は嬉しくなった。

「そ、そうかな？」

「そうかなあ」

いまいち同意できないらしい千里は、呟くように言いながら、ドアを口に運ぶ。

「もおっ、千里ってば、式の日の啓ちゃん、忘れたの？」

詩織はつつかかのように千里に聞く。千里は唇を突き出した。

「確かに、あの日の啓ちゃんは……違ったね」

「でっしょう？」

詩織は我が意を得たりと、満足そうな表情になる。

「それにほら、昨日だつてさ。沙帆子が誤解してるとって思って、すっ飛んできてくれたじゃん！」

「……そうだけど……なんか、わたしの中では、まったく別人格で存在してるみたいだわ。いつも  
の啓ちゃんと、沙帆子と一緒にいるときの啓ちゃん……まるきり違うんだもの」

千里が顔をしかめながら言うと、詩織が噴き出した。

「そうそう、そういうことなんだよ」

「何がそういうことなのよ？」

「だから、別人格って思ってたればいいんじゃないかってこと。つまり、沙帆子と一緒にいるときの啓  
ちゃんは、クールじゃないほうだから、きっと沙帆子とべったりしていたいに決まってるってこと  
だよ」

詩織の話を聞いている千里は、面白くなさそうな顔をしていたが、コップの水を飲み、ため息を



つく。

「あんたって、ほんと思考が柔軟じゅうなんっていうか……でも、そう考えるのがベストなのかもね」  
千里は呆れ口調から一転、詩織の意見を肯定する。

「えっへへーっ」

詩織は嬉しそうに笑い、千里は苦笑しつつ沙帆子に向いてきた。

「それで？ 沙帆子、写真のほうはどうなったのよ？」

「あ、ああ。もらえた」

「へ、へえ〜」

千里はずいぶんと意外そうだ。

「実はね、場所を選ぶってのは、意味がわかんなかったんだけど……」

千里が頼みごとというのは場所を選んですれば、啓史みたいな人でもきいてくれるものだ、とアドバイスをくれていたのだが、結局どういうことかわからなくて沙帆子はそう言った。

しかし、そこまで言うのと、千里は口に入れた物を喉のどに詰まらせたのか、激しくむせ始めた。

「ち、千里、大丈夫？」

苦しげにゴホゴホやりつつも、千里は先を話せというように身振りで促す。

「う、うん。お風呂から上がったら、せ……け、啓ちゃんかね、パソコンくれるって言うんで……」

「えっ、パソコンを？」

「うそおっ、沙帆子、パソコンもらったのお？」

驚くふたりに、沙帆子は笑みを浮かべてこくと頷いた。

「うん。自分が使ってたやつだけどって」

「わおっ、沙帆子やったじゃん」

「う、うん。そいでね、そのパソコンの中に、千里がくれた写真、全部入れてくれてたの」

「ほらっほらっ、もおっ、やつば最高にやさしいじゃん！」

「ほんとだね」

詩織の言葉に、千里も感心したように言う。

沙帆子は満ち足りた気分でオムライスを口に運んだ。

## 2 ありえない事態

エビピラフをあつという間に食べ終え、メロンソーダを飲んでた詩織が、唐突たうとつにため息をついた。いまのいままで元気がよかったのに、急に萎しおれた詩織を見て、沙帆子は「どうしたの？」と尋ねた。

「あ……いんや……まあ、そのね」

自分をじっと見つめている沙帆子と千里にちらちらと目を向け、詩織はもごもご言う。

「もしかして、明日のこと？」

「そう。魔の三者面談だよ。……あーあ」

言いながら、詩織は唇を突き出した。

「詩織、かなり成績落とした感じなの？」

「……ん。まあ……ね。なんとか追試は免れたって感じだもん」

今頃、追試の憂き目に遭った生徒たちは、必死になってテスト用紙と戦っているはず。その仲間にならずにすんだとわかった瞬間、詩織は安堵で腰が抜けたようにへたり込んでいたっけ。

「まったくもおっ」

まるで出来の悪い子どもを見る母親のような眼差しを詩織に向けつつ、千里はため息をつく。

「ちつとも集中できなくてさ……頑張りはしたんだよ。けど。あーっ、ママの顔が鬼へと変化するの、目に見えるようだよ」

詩織は卑屈な笑みを浮かべて言う。

「あなたのママ、怒ると怖いもんねえ。もう腹をくくるしかないね」

千里の言葉を聞きながら、沙帆子は詩織の母を頭に思い浮かべた。詩織によく似ていて、笑顔の絶えない楽しい人だが、確かに怒ると怖い。

「明日の朝起きたら、ひどい風邪にかかってたりしないかなあ。ねえ、風邪で熱出して、ベッドでうんうん唸ってる知り合っていない？」

「馬鹿ねえ。いまうつつても、潜伏期間つてのがあるんだから、間に合いはしないわよ」

「わーかってるよお……言ってみただけだもん」

詩織は拗ねたように言う。

「それで、沙帆子。あなたはどんな感触？」

「わたし？」

「沙帆子はさ、素敵なカテキヨーがついてたんだよ。あのスーパーボーイ森沢君をスパンと抜いて、トップになってるかもよん」

沙帆子は顔を引くつかせた。森沢大樹は生徒会長であり、千里の彼氏だ。詩織がスーパーボーイと表現したように、文武両道、なんでもござれな人物なのだ。成績トップの座も、譲ったことがない。

もちろん詩織が冗談で言っているのはわかるが……

しかし、素敵なカテキヨーという言葉は聞き捨てならない。そんないいもんじゃなかったのだ。テスト勉強に際し、啓史は家庭教師を買って出してくれた。最初は、佐原先生を独り占め♪ なんて具合に浮かれていたのだが、とんでもないスパルタだった。沙帆子の人生で、あんなに勉強したのは初めてだった。頭を使いすぎて発火しそうな気がしたくらいで……

「あのね、素敵なカテキヨーなんかじゃないってば、鬼なんだって、鬼のカテキヨー」

沙帆子はスプーンを振り回しながら反論した。

「それで、鬼のカテキヨーの効果はあったの？」

千里から冷静に聞かれ、沙帆子はスプーンを持った手を下ろして「う、うん」と頷いた。

「まあ……前回よりはいいかなって思う」

「ほおっ、控えめな沙帆子がそう言うってことは、やっぱり森沢氏のトップ危機かい？」  
「もおっ、詩織ってば」

沙帆子は立ち上がり、詩織の肩をはたこうと手を伸ばしたが逃げられた。

「それで、千里はどうだったのよ？」

「わたしはいつもと同じくらいかな」

千里の言葉に、沙帆子はほっとした。自分のせいで、千里と森沢の間に溝を生じさせてしまい、千里はいまいち試験に集中できなかったんじゃないかと、心配していたのだが……

安心してよきそうかな？

「試験もあつたのに……わたしのせいで、ふたりにはいっぱい迷惑かけちゃったね」

沙帆子は申し訳なく思いつつ、ふたりに言った。詩織が笑いながら首を横に振る。

「迷惑なんかぜんぜん感じてないよ。ねっ、千里？」

「うん。とにかく良かったよ。あなたの恋が実って。……あなたが啓ちゃんのことを好きだつてわかつたときは……ごめんね、沙帆子……絶望的だと思つた」

複雑な表情を浮かべている千里を見て、沙帆子は笑つた。

事実、絶望的な恋だつたのだ。

それがいま、啓史と結婚し、彼と暮らしているとは……

「なんせ、あの啓ちゃんだからねえ。彼のハートを射止めたのが、親友の沙帆子だつたなんてさ……驚き桃の実、びつくらこんきちだよ。うーむ」

おかしい言葉を口にした詩織は、腕を組み、沙帆子を値踏みするように見る。

「啓ちゃん、沙帆子のどこに惚れたんだろうねえ？ めちゃくちゃ聞いてみたーい」

「わたしは、わかる気がするよ」

千里はそう言つてドリアを口に入れた。

「えっ、千里、わかるって？ あ、あの、どんなところ？」

沙帆子は身を乗り出し、千里に尋ねた。

佐原先生が自分のどんなところを好きになつてくれたのか、知りたい。

真剣に尋ねたというのに、千里は笑い出す。

「啓ちゃんに、直接聞きなよ」

「だ、だつて……聞いたつて答えてくれないよ」

唇を突き出して言つた沙帆子を、千里はじつと見つめてきた。そして……

「君のこんなところが好きだなんて、素直に口にするタイプじゃないよね」

「で、でもさ、ほら、場所によつてはさ、口にしてくれるんじゃないかなあ？」

「場所？」

千里と同じようなことを詩織からも言われ、沙帆子は驚きつつ、聞き返した。

「うん。ベツ、いでっ！ ち、千里痛いよお」

千里はどうしたのか、詩織の頭を音がするほど強く叩いた。

「その話はいいわ。それより、レクリエーション大会、一週間後だね。楽しみ」

「千里は、運動なんでもござれだもん。まあ、わたしは綱引きを当てたから、いいけどさ」  
「わたしも、綱引きがよかったなあ」

沙帆子は羨ましさを込めて詩織に言った。

校内レクリエーション大会は、毎年年度末に行われるスポーツ大会だ。

競技種目は綱引きとバレーボールとバスケットボール。運動に自信のない子は綱引きに出たがる。それで抽選になったのだが……沙帆子は抽選から外れてしまい、結局バレーボールに出ることになってしまったのだ。千里も一緒にチームのただけが救いだ。

そのとき、千里の携帯がバイブ音を発した。千里は携帯を開いて確認する。

「愛しの彼からかい？」

詩織がからかうように言うも、千里は携帯を操作しながら、真顔で「そう」と答えた。

「ちえっ、からかいがない子だねえ」

詩織はつまらなそうに言い、沙帆子のほうに向き直った。

「沙帆子さ、運動神経抜群の彼がついてんじゃん。勉強と同じで特訓してもらいなよ」

やれやれ、ターゲットをわたしに変えてきたか……でもま、可哀想だし、のってやるかな。

「詩織ってば、他人事だと思って楽しがっちゃって」

「そうだ。まだ聞いてなかったけど、沙帆子、啓ちゃんはどれに参加するって？」

知っていて当然というように聞かれ、沙帆子は戸惑った。レクリエーション大会には、教師も参加するのだ。啓史がどの競技に参加するのか、沙帆子だって気になるが……

「……聞いてない」

「えーっ、妻なのに？」

「詩織！」

沙帆子を『妻』と呼んでしまったことを警告するように、千里に名を呼ばれ、詩織は「ご、ごめん」とぺこぺこ頭を下げる。

結婚はしたけど、佐原先生のこと、知らないことだらけなのだ。

「ああ、そういえば……昨日……け、啓ちゃんの……友達が突然やってきてね」

ようやく啓ちゃん、と口にする。千里や詩織みたいに普通に言えたらいいんだけど……なかなか口にしづらい。

「えっ？ そうなの？」

「うん。深野さんって言うひとで……そうそう、その深野さんが、ミス白百合さんの恋人だったの」

「ええーっ！」

千里と詩織は同時に驚きの叫び声を上げた。そして千里が「ちよっと、なんでもっと早く話さないのよ」と叱ってくる。

「だって……いま、思い出したから……」

「まったく、のんびり脳なんだから」

の、のんびり脳？

詩織がケラケラ笑い出した。

「のんびり脳だつてえ」

「何を笑つてるのよ、あんただつて能天気脳のくせに」

詩織を一瞥して千里は言い、沙帆子のほうを向いてくる。詩織は顔を歪め文句を言おうとしたが、千里は詩織を無視して沙帆子に話しかけてきた。

「それで、あんたのことは結婚相手だつて紹介したの？」

「ううん。わたしは隠れてたの。……啓ちゃん、深野さんにわたしのことを紹介したかったけど、もうひとり仲のいいひとがいて、そのひとはお酒を飲むと、口が軽くなるタイプだから、話せないって。でも、そのひとだけ仲間外れにするのは嫌だから、深野さんにも話さないことにしたって」

「ふーむ。結婚式にも呼ばなかったんだもんね。あんたが卒業するまで内緒にしとくのがいいだろうね」

「うん」

「それで？ 結局、沙帆子はふたりの会話は聞けなかったわけね？」

「ううん。キッチンに隠れてたから、話は聞いた」

「あつ！」

急に千里が声を上げ、沙帆子は驚いた。

「何？」

「その深野つてひと、噂を聞いたんでしよう？ それで啓ちゃんのところに来たんじゃないの？」

「ああ、そうか。自分の恋人が友達の結婚相手だなんて騒がれてるの聞いたら、じつとしてられないよね。うひゃーっ、啓ちゃん、大丈夫だったの」

「ちよ、ちよと待って。そういうことじゃないの。ふたりとも、話を勝手に進め過ぎだよ」

「あら、違うの？」

「うん。深野さんがやってきたのは……えつと……ああ、そうそう、千里の従兄の飯沢さんのところに……」

「あっちゃん？」

「うん。遊びに行ったら、結婚式のパンフレットが置いてあつたつて、それで飯沢さんに彼女ができたんじゃないか、結婚するつもりなんじゃないか、何か聞いてないかって、啓ちゃんに聞きにきたみたいだった」

「結婚式のパンフレット？」

「わたしたちが、結婚式の招待状と一緒に、飯沢さんに渡したものだと思うんだ」

千里は「は？」と声を上げたあと、顔つきを変え、「あっちゃんてばあ」と不穏な声を出す。

詩織はそんな千里を見て、くすくす笑い出した。

「敦さんらしくないミスだね」

「ワザとかもしれないわ」

「えっ？」

「あつちゃんのことだもん。……何か考えがあつてつても考えられるわ」

「ほーっ、そうなんだ」

「まあ、あつちゃんのことはいいわ。それで、あとは？」

「それくらい……」

白井さんに愛されているか自信がなくて、佐原先生に怒鳴られてたなんて話は、する必要はない。ああ、でも……話の最後に、佐原先生が深野さんに薔薇の花を一輪渡したんだ。その理由が気になってるんだけど……これは、先生に聞かなきゃ真相はわからない。けど、教えてくれなさそうだったな……

「ねえ、結局、啓ちゃんとミス白百合はなんの関係もなかったんだよね？」

「う、うん。白井さんと会ったのは、二、三回だって言ってた」

「なんだ、そうなの？」

「付き合ったりしてないんだね。よかつたねえ、沙帆子」

「う、うん」

実は、白井さんは昔、佐原先生のことを好きだったらしいけど……そのことは言わないでおこう。

「でも……なら、なんであんなにも真実みたいに、あの噂、広まったのかな？」

詩織が納得いかなそうに口にし、沙帆子はドキドキしてしまう。

「ミス白百合ってひと、綺麗な人みたいだし……啓ちゃんはそのビジュアルだし、そんなふたりが付き合ってもおかしくないって発想から噂になって広まったのかもしれないね」

「おおっ、きつとそういうことだよ。さすが千里だね。よーっしや、これで啓ちゃんの身の潔白は証明されたね」

詩織は晴れ晴れとした顔で言う。

「噂がどうだろうと、もういいじゃん。ねっ、沙帆子」

詩織の言う通りだ。噂がどうだろうと、真実がそうじゃないのなら、もうどうでもいいことだ。

それでも……『合コンの二の舞』って話だけは、やっぱり気になる。どうも、あの話には、ミス白百合さんが絡んでいる気がするんだよね。

昨夜、深野さんが帰ったあと、話してくれそうだったけど、結局、聞けずじまいだったから……  
「あらっ」

驚いたように千里が叫び、沙帆子は彼女に視線を向けた。千里は窓の外に目を向けている。

沙帆子も窓の外を見てみたら、なんと森沢と、彼の親友である広澤脩平が、道路を隔てた向こう側の歩道を歩いている。

沙帆子は思わず詩織を振り返った。実は広澤は、詩織の片思いの相手なのだ。

「えっ？　なんで、あの子が！」

千里が動揺した声で口にした。驚いた沙帆子は、また窓の外に視線を向けて見た。

あつ、あの子は……？

なんと、広澤にバレンタインデーのチョコを渡した一年の女子が、ふたりと一緒にいる。

な、なんで、この三人が一緒に？

「千里？」

沙帆子も動揺どうようしてしまい、千里に呼びかけた。

詩織はひどく顔を強張こわばらせていて、話しかけられる雰囲気ではない。

「大樹には、ここにいることを知らせただけ……あつ、入ってくる」

「な、なんで！」

パニックに駆かられたように詩織が叫ぶ。

「大樹ってば、何を考えてるんだろ？」

困惑した千里の言葉を耳にしつつ、沙帆子は店内に入ってきた三人を見つめていた。

### 3 しみじみ同感

喫茶店の入り口で、森沢は店内をさっと見回した。沙帆子たちを見つけ、右手を上げて合図する。「お待たせ」

開口一番の森沢の言葉に、沙帆子は面食らった。彼はにっこりと微笑んでいる。

「遅くなってごめん」

広澤は三人に向かって言い、空あいている詩織の隣の席に、当然のように腰かけた。

「君、もう気がすんだろ？」

まるで言い聞かせるように、森沢は一年の女子に言った。彼女は肩を落とし、しょんぼりしている。

「はい。広澤先輩、わがまま言っつてすみませんでした。わたし……勘違いしちゃって……だ、だつてこんな……」

萎しおれた声でぼそぼそと言いつつ、彼女は手に提さげている小さな紙袋を持ち上げた。可愛らしい紙袋だ。

「こんな立派なお返し、広澤先輩からいただいたいちゃったから……わたし……」

一年の子は、泣きそうな顔になっている。

「あ……ああ、そうだった。えっと……」

その子に構わず、広澤は通学鞆かばんを開けて、中から紙袋を取り出し、詩織に向けて差し出した。

「し、詩織……君に、これ」

「あ、ああつと、つと。あ、ありがと……脩平」

顔を真っ赤にして答えた詩織は、それでも広澤からためらいなく紙袋を受け取った。

沙帆子は目を丸くした。

な、何がどうなっているのだ？

詩織に……しゅ、脩平って？ いったいいつの間に、このふたりは名前で呼び合う間柄に？

「ホワイトデーのお返し。君が欲しいって言ってたからさ。ちよつと奮ふん発ぱつしたんだ、開けてみて」

広澤の言葉はフレンドリーだけど、語り口がぎこちない。

詩織はこくこくと顔うなじき、手にした紙袋の中へ手を突っ込んだ。そして、中から透明なビニールに包まれたものを取り出した。手のひらくらいのクマのぬいぐるみだ。

「わあっ、か、可愛い！」

詩織は不自然とも思えるような喜びの声を上げた。

「あ、あの……失礼します」

一年の女子は、突然叫ぶように言い、くるりと背を向けるとタタタッと駆かけて行った。

沙帆子には違和感バリバリの詩織と広澤のやりとりだったが、あの子はそうは思わなかったようだ。

「はあー、やれやれだったな」

喫茶店から彼女が出て行き、完全に姿が見えなくなったところで森沢が口にする。

「あのおく、いらっしやいませえ」

新しくやって来た客のために水を運んできていた店員は、話しかけるタイミうかがングを窺うかがっていたらしい。ふたりの注文を取った店員が離れてゆき、五人は改めて顔を見合わせた。

「驚かせてすまない」

この場に漂ただよっているおかしな空気を払ふ拭しするように、森沢は沙帆子たち三人に向けて言い、空あいている椅子を引ひつ張はつてきて、千里の側に座り込んだ。

「どういうこと？」

眉を寄せた千里は、胸の前で腕を組み、森沢に鋭い眼差まなざしを向ける。

「僕のせいで、面倒に巻き込んで、ごめん」

森沢に先んじて、広澤が気まずそうに謝罪し、頭を下げた。

「まったく話が見えないわ。……ちよつと、詩織」

「は、はいっ」

千里から呼びかけられた詩織は、クマを手てにピンと背筋を伸ばした。

「あんたも加担かたんしてたわけ？ いったいいつの間に？」

「わ、わたしは……その……よくわからないんだけど……昨日の夜、広澤君から、明日驚かせるかもしれないけど、そのときは話を合わせてくれて頼まれて……こういうことだったのかって、いまわかって……」

「昨日から？ ……どういうことなの？ どちらか、説明してくれる？」

千里から怒ったような声で問いかけられた森沢と広澤が、困ったように目を見交わす。

「広澤、僕が話そう」

「ああ……それじゃ、頼む」

広澤は、ずいぶんとやつれている感じがした。

「つまりだ。僕には必要ないし、やめとけって言ったんだが、こいつが物をもらえばなしってわけにはいかないって、バレンタインデーにももらったチョコのお返しを、どうしてもあの子に渡すって言い張るんでね」

「だって、借りを残すみたいで嫌だったんだ」



広澤はしかめた顔で言葉を添える。

「だそうだ。それで、普通に渡したら、さらに面倒なことになると思ったんでね。それなら一芝居打てど、僕がそそのかした」

「それが、いまの？」

「ああ」

「なんで詩織に？ この場合、沙帆子じゃ……」

「自分の首をしめるようなことはしたくないよ」

「首を……それって………啓ちゃん？」

「ああ、啓ちゃんだ」

にやりと笑って森沢は肯定する。

「あのひとは、誰より敵に回したくない」

「なんか……そう呼ぶのって、だいそれたことのような気がして、怖いんだけど」

顔をしかめて広澤が言い、そんな広澤を見て、森沢は苦笑する。

「大樹のことだから、あの子が納得するような話をでっちあげたわけね？」

「人聞きが悪いが……まあ、そうだ」

「で、でも……あの子……可哀想だったね」

同情のこもった声で詩織が言う。その言葉がかなり胸にこたえたようで、広澤は顔を強張らせた。

「森沢に、この際、とことん憎まれるようなことをしろって言われたんだ」

話がようやく見えてきて、沙帆子は小さく相槌を打った。

「広澤は、いままで余計なやさしさを彼女に見せてきた。応える気がこれっぽっちもないのなら、

傷つけてでも、嫌な男になるべきだ。それに……」

森沢は言っているのかと迷うように、一瞬言葉をとめ、そして続けた。

「あの子は……用心したほうがいいように思う」

「やっぱり、そう思う？」

「君もそう感じたのか？」

「まあね。あの子は……悪いけど……まっすぐじゃないと思う」

森沢と千里の話が理解できず、沙帆子は首を捻った。

「あの、まっすぐじゃないって？」

そうふたりに聞いたのは詩織だった。森沢と千里はどっちが口にすべきか目を合わせたが、森沢が説明に回ることにしようだった。

「あの子は、広澤に本気で恋をしているわけじゃないと、僕には思える」

「それがほんとなら、僕も気が楽なんだけど……」

「本気じゃなくても、傷つきはするさ。プライドとか、抱いていた夢がつぶれたことに対してとか  
な……」

「プライドに夢？ そんなものにまで、僕は責任を負えないよ」

「馬鹿だな、広澤。あの子に対してどんな責任も感じるな。あの子がたとえどれだけ傷ついたとし

ても、それは君のせいじゃない。勝手に好きになって、応えてもらえなくて傷ついてても、それを好きになった相手のせいにするのは理不尽だろ？」

広澤に向けて意見していた森沢が、沙帆子に視線を向けてきた。

「広澤、榎原さんがお前に対して責任を感じたら、嫌だろ？」

「森沢……」

咎めるように森沢の名を呼んだ広澤だったが、気まずそうな目を沙帆子に向けてきて、ため息をついた。

「もちろんだ。……森沢、君の言いたいことはわかったよ」

「うん。それで、話を戻すけど……。僕が思うに、あの子は広澤に本気で恋をしていたわけじゃない、女子生徒たちに人気のある広澤の彼女になりたかっただけじゃないかってね」

「もてるひとなら、誰でもよかったってこと？」

「まあ、誰でもってことはないだろうけど……」

森沢らしくなく口ごもっているのを見て、千里が眉をひそめた。

「大樹、何かあった？ それとも何か知ってるの？」

「うーん。口にしていいのか……」

「森沢、なんなんだ？ 話してくれないと気になるぞ」

「うん……実はあの子、一学期に同級生と付き合ってたらしい。一年の中ではかなり人気があるやつで、彼女が自分から告白して……」

「その子とは別れたわけ？」

「ああ。……それで……つまり、心変わりをしたわけで……」

「それって、広澤君にとってことでしょ？」

「違う」

「えっ、違うの？ なら、誰に？」

「君らが言うところの……啓ちゃんさ」

「は？ それ、マジ？」

「ああ、けど、さすがに無理だと悟ったのか、ターゲットを広澤に変えたらしい」

「なんか僕……貧乏くじを引いた気分なんだけど……」

「まあ、そうとも言えるな」

くつくつと森沢が笑い、むっとした顔の広澤は、腕を伸ばして森沢の肩を小突く。

「とにかく、安心するのはまだ早いってことだ」

「そう？ いくらなんでも、もう諦めるんじゃない？」

「僕が不安に思うのは、あの子がまたターゲットを戻さないかということなんだ」

「ターゲットを戻す？」

「それって、ま、まさか……」

「ああ。啓ちゃんだ」

森沢の答えに、沙帆子は心臓がドクンとはねた。

「けど、もう結婚したのよ」

「それを真実として受けとめているやつは少ない。色んな噂が好き放題に飛び交って、みんな半信半疑だ」

その言葉に、沙帆子も押し黙って考え込んだ。  
確かに森沢の言う通りだ。

「あの……だつてさ、あれ嘘なんだろう？」

戸惑いを浮かべ、話に割って入ってきた広澤に、森沢が珍しくぎよつとしたような顔で固まった。  
「……だった」

森沢はぼそりと口にした。

「だろ？ だつて、君と……」

広澤は沙帆子のほうを向いて目を合わせ、すぐに視線を逸らす。

沙帆子のほうは、話が啓史と自分のことになり、ドキドキして仕方なかった。

「付き合ってるんだろ？ だとすれば、結婚してるわけではない」

広澤は、沙帆子と啓史が結婚したことまでは聞かされていらないらしい。

「て、いうかさ……こんな質問いまさらだけど、君、本当に付き合ってるの？ いまもまだ信じられなくて……」

「ほ、ほんとです。……信じられないかもしれないけど……」

「そうか。でもやつぱり信じられないな。……みんな、よく信じられるなつて思うよ」

「信じられなかったよ。もちろんわたしも。あ、あのさ、そいで広澤君。これつて、ほんとにもらつちやつていいの？」

クマを広澤に見せつつ、詩織はおずおずと聞く。

「ああ、もちろんだよ。それは君に買ったんだ。チョコのお礼だよ。こんな形であげることになつて……あれだけど……。喜んでもらえたら……」

「喜んでるよ！ もちろん。あ、ありがとう、広澤君」

詩織は、感激と喜びを胸いっぱいに叫んだ。

広澤はほつとしたように微笑んだが、詩織の広澤に捧げる想いがはっきりと見え、沙帆子の胸は切なく疼いた。

「それで？ 大樹、どんな話をあの子に吹き込んだの？」

運ばれてきたばかりのコーヒーを飲んでいる森沢に、千里はせつつくよう尋ねる。

沙帆子も、答えを望んで頷いた。

コーヒーカーップをテーブルに置き、森沢は肩を竦めた。

「もう、だいたい想像ついてるだろ？」

森沢の言うように、ある程度は想像がつく。広澤は、詩織にチョコのお返しを渡した。まるでふたりは、すでに付き合っているかのように……

「だいたいね。でも、今後のためにも、わたしたち三人には、しっかりと話を聞かせといてくれ

ないと……」

「う、うん」

クマを抱きしめた詩織も、頬を赤く染めて頷く。そんな詩織は、沙帆子からすると、可愛く見えてならない。

「つまり、広澤の本命は、江藤さんだつてことにした」

「わわ」

すでに理解していたことだろうに、森沢の改まつての説明に、詩織は焦つたような声を上げる。

「あの、江藤さん、本当に迷惑かけてすまない」

自分に向けて謝つてきた広澤に、詩織は必死に首を横に振る。

「め、迷惑じゃないよ。役に立てるなら、どんなことでも引き受けるよつて言ったの、わたしだしさ……ど、どんなことでも、どーんと任せてくれて、い、いいからさ」

焦りのあまり、どもりながら詩織は言い、あははと声を上げて笑つた。その顔はどんどん赤くなつていく。

広澤のことを好きな詩織にしてみれば、この状況は嬉しいことなのだろうか？ でも、嘘なわけだし……。詩織のために、単純に喜んでいいものなのか……。複雑な心境だ。

「それじゃ、沙帆子のことはなんて説明したの？」

自分の名が挙がり、沙帆子は千里と森沢に視線を向けた。

「うん。バレンタインデーのときは、江藤さんには……その、彼氏がいたわけだから……。広澤が

江藤さんのことを好きなことを、誰にも知られたくなくて、まあ、フリーの榎原さんが好きだということにしたと……」

「それで、いまは彼氏と別れてフリーになった詩織と、付き合い始めたつてことにしたわけ？」

「ああ。まあ、そうだ」

「あの子が誰かに話したら、困つたことにならない？」

「その話をひとにすることは絶対にないさ。彼女は広澤にフラれたわけだし、自分がフラれたなんて、彼女みたいなタイプの子が知られたいはずない」

「うん、確かにね。でも、これから先、ふたりが本当は付き合っていないつてこと、気づくんじやないかな？」

「本当に片思いしてたのなら、その可能性はある。けど、そうでないのなら、こいつへの興味は消えるさ。ただ……」

「ただ、何？」

「うーん。フラれた恨みは残るだろうな」

恨みという言葉に、沙帆子はぎよつとした。

「ありえるわねえ。仕返しなんてもの、考えないといいけど……」

「考えないと思いたいが……」

「君ら、怖いこと言うなあ」

広澤は渋い顔で森沢と千里に言う。

「不安を煽りたいわけじゃないけど……もう終わったとタカをくくって、気を緩めないほうがいいだろうと思う」

「森沢……僕、しつかり不安を煽られてるけど……」

広澤が森沢を睨む。すると森沢は、広澤を睨み返し、音を立ててテーブルを叩いた。

「いいか広澤、彼女に目をつけられたのは、君のせいじゃない。だが、こんなやつかいなことになったのは、お前の甘さなんだぞ」

森沢の指摘に、広澤は顔をしかめた。

「チョコを受け取らなきゃ良かったってことか？」

「その通りだ。きっぱりもらえないって断つてれば、それでこの話は終わったんだぞ」

「……返す言葉がない」

森沢の意見はもつともだと思つたようだ。広澤は情けない顔になり、ため息まじりに言う。

そんな広澤を見つめる沙帆子の心はとんでもなく複雑だった。

もしも、あのとき、広澤君が一年の女子からチョコを受け取っていなかったら……

わたしは……広澤君にチョコを渡したよね。

沙帆子は緊張を感じ、息を詰めた。

もしチョコを渡していたら、未来は大きく変わっていたはず……

落ち着いていられなくなり、沙帆子はもじもじと身を揺らした。

ほっとしている自分が後ろめたくてならなかった。いま広澤は、チョコを受け取ったために困

た事態に陥っているというのに……

チョコを受け取ってくれてよかったって、ほっとしてるなんて……

「あのさ、……どうして、結婚したなんてことにしたんだい？」

ずっとそのことが心に引っかかっていたようで、広澤はためらいがちに沙帆子に尋ねてきた。

「女避けってことなんだろうと思うけど……なにも結婚したなんて話にまで飛躍させなくても、よかつたんじゃないかと思えてさ」

真実を知っている三人が、沙帆子に視線を注いでくる。

「えっと……みんな、あの、榎原さん、どうかした？」

四人の雰囲気、広澤は不審さを覚えたようだった。

どうすればいいんだろう？ 広澤君になんて答えればいいんだろう？

やっぱり、広澤君には内緒にしておくべきなのかな？

佐原先生は、どう考えてるんだろう？

啓史の伯父であり、沙帆子の通う高校の校長である橘広勝は、結婚式の参加者以外にはもらすなと言っていた。

けど、すでに森沢君は、佐原先生から聞いて知っているんだよね……

「あ、あのさあ、沙帆子。広澤君にも……」

おずおずと詩織が口にした途端、千里は「詩織」と警告するように呼んだ。

「だ、だって……」

「何、どうしたの？」

戸惑ったように広澤が言う。

森沢と千里は、自分たちからは話せないと思っているようで、黙り込んでいる。

詩織は気まずそうに俯うつむいてしまった。

たぶん詩織は、この中で、広澤だけを仲間外れにしている状態が嫌なのだろうと思う。

それに森沢君だって……広澤君に内緒にしている状況は嫌に違いなくて……千里も、できれば話してほしいと思っっているんだよね。

わたしも、広澤君は口が堅いし信用できると思ってる。

なら……

沙帆子は意を決し、広澤に向けて口を開いた。

「あのね……本当なの……結婚のこと」

「榎原さん？ でも、それじゃ、君は？ ……し、失恋したのかい？」

「広澤、そうじゃない。相手は彼女なのさ」

「へっ？ 相手は彼女？ 結婚したのが……か、彼女おっく？」

広澤は困惑顔で口にし、沙帆子を指さしてきた。

沙帆子はどんな顔をしてよいかわからず、困り顔で頷うなずいた。

口を開けて叫び声を上げようとした広澤の口を、さっと立ち上がった森沢が瞬時に塞ふさいだ。

「気持ち、わかるよ。広澤君」

千里はしみじみと口にした。

#### 4 すでに確定

「そろそろ出ようか？」という千里の呼びかけに応じて、それぞれに支払いをすませ、みんなで店の外に出る。

正直、沙帆子は自分の独断で広澤に秘密を話してしまってよかったのかと、いまさらながら不安にかられていた。啓史に相談してからのほうがよかったのではないか？

「帰るか？」

沙帆子のそんな後悔をよそに、森沢が全員を見回し解散の号令のように言った。

「ああ。……それじゃあ、僕、自転車、学校だから」

そう告げた広澤は、ぎこちなく手を上げた。まだ驚きから抜け出せずにいるのだろう。すぐに背を向け、学校に向かって歩き出した。沙帆子は広澤の背中を見つめながら困ってしまった。自分も学校に戻らねばならない。

学校まで、広澤の後ろに黙っついていくというのは……なんとも気まずい。

「ひ、広澤君」

詩織が焦あせったように広澤に呼びかけた。

振り返った広澤に、詩織は胸に抱きしめていたクマを持ち上げて見せる。

「こ、これ。あの、本当にありがとう」

広澤は無言で笑みを返し、右手を振ってまた歩き出した。

「それじゃ、行こうか？」

森沢は、沙帆子も含めた三人に声をかけてきた。

「うん。それじゃ、沙帆子、また明日ね」

「あれっ、榎原さん……あ、ああ、そうか……車？」

学校のほうを指し、森沢が聞いてくる。

なんとなく決まりが悪く、沙帆子は俯きかげんに頷いた。代わりに千里が答える。

「そういうこと。じゃあね、沙帆子」

「ああ、うん」

「沙帆子、また明日」

詩織が慌てたように声をかけてきた。どうやら詩織は、ずっと遠ざかる広澤を見つめていたらしい。そんな詩織が、なんともいじらしくてならない。

残していく沙帆子を気にする素振りを見せながらも、三人は駅に向けて歩き出した。

遠ざかっていく三人の後ろ姿を見送っていたが、ずっと立ち尽くしているわけにもいかない。

広澤と充分な距離ができているのを確認し、沙帆子も歩き出した。すでに三十メートルほど間隔があるし、男性の広澤のほうが歩くのが速いはず。

そう安心していたのに、サイクルショップの前で広澤は足をとめ、店先に並べてある自転車を眺め始めた。

そのまま広澤に近づいていくわけにもいかず、沙帆子は足をとめた。

熱心に見ているという様子ではない。なんとなく視線を向けているだけという感じた。それでもまたすぐに歩き出すそぶりはない。

このまま歩いて行って、彼の横を何気なく通り過ぎるなんてわけにもいかないし……

気づかないでいてくれたらいいけど、目を合わせてしまったら……

気まずいよね……そりゃあもう、ものすごく……

佐原先生と結婚したのがわたしだったという話は、広澤君の中でまだ消化しきれていないはずだもの……

その場から動けなくなり、沙帆子は途方に暮れた。

ど、どうしよう？ 広澤君が動き出すまで待ち続けるというのも、なんかなあ。

そうだ！ 道の向こう側に渡って、学校に戻ることにしよう。沙帆子は回れ右し、交差点のあるところまで引き返すことにした。

横断歩道を渡っていた沙帆子は、「沙帆子さん、沙帆子さ〜ん」という自分を呼んでいる声を耳にし、驚いて声のするほうを振り向いた。

沙帆子は目を見開いた。

彼女に向けて手を振りながら、歩道を走ってくるのは、なんと広勝の妻の麗子ではないか。歩行者用信号が点滅を始め、沙帆子は前に進むのをやめて、引き返した。

「よかったわあ」

ハアハアと息を吐きながら、麗子はほっとしたように笑みを浮かべる。

「驚きました。偶然ですね」

「あらっ？ 啓史さんから聞いていない？」

沙帆子は意味がわからず首を傾げた。

「あの……聞いてっ……」

「連絡きていない？ 彼に頼まれてきたんだけど」

「えっ？ い、いいえ」

いったんは首を横に振った沙帆子だが、ハツとし慌てて携帯を取り出す。

授業が始まる前に、サイレントにしたままで。

ま、まさか、先生から連絡が入ってたり……

携帯を見た沙帆子は、思わず「うっ」と呻きそうになった。

啓史からメールが届いている上に、電話が二度もかかってきているではないか。

うわーっ！ ど、ど、どうしよう。先生からのメールも電話も無視しちゃったなんて！

「す、すみません。連絡、きてるみたいです。授業でサイレントにしてて、気づかなくて……」

「そうだったのね。いまね、そこで沙帆子さんのお友達と会ったのよ」

「千里と詩織にですか？」

「ええそう。車を駅前の駐車場に停めて、啓史さんから聞いた喫茶店に向かっていたら、おふたりに会って。あなたのことを聞いたら、いま学校に向かって歩いてったところだって聞いて……」

「そうなんですか」

麗子の話を聞きながら、沙帆子は啓史からのメールを開いてみた。

（話がある。電話くれ）

こ、これだけ？

「沙帆子さん、これからちょっと付き合っってほしいの」

「は、はい」

麗子の突然の登場にはびっくりしたが、広澤を気にしながら学校に戻らなくてすむのだ。かえってありがたい。

佐原先生からのメールと電話の用件は、麗子さんのことだったんだろうけど……

一度啓史に電話してみるべきだろうかと悩みながら、沙帆子は麗子と肩を並べて歩き出した。

「あの、付き合うってどこに？」

沙帆子は麗子に尋ねた。

「啓史さんから頼まれたの」

「頼まれた？」

いったい啓史は、麗子に何を頼んだというのか？



「広勝さんと話したんだけど……ふたりでお出掛けするときには、沙帆子さん、お化粧をしたほうがいいんじゃないかしら」

「お化粧ですか？」

「ええ。沙帆子さん、お化粧すると、とても雰囲気が変わるし……」

そう言った麗子が、顔を寄せてきた。

「結婚式の花嫁姿、本当に綺麗だったわよ。大人びて、とても高校生には思えなかったわ」

小声で囁かれ、顔がぼぼつと赤らむ。

「あ……ありがとうございます」

照れくさく思いつつ、沙帆子はお礼を言った。

「あれだけ雰囲気が変わるなら、お化粧さえしていればふたりでいるところを学校関係者に目撃されたとしても、あなただっことはわからないと思うのよ」

沙帆子は頷いた。

その点はすでに実証済みだ。千里ですらわからなかったのだ。

お化粧することで、周りの視線を気にせずに、佐原先生と一緒に外を歩けるならとても嬉しい。

「啓史さんに話したら、彼も納得してたわ」

そうなのか。

「それで、化粧品を購入するなら、わたしが手伝うわよって言ったのよ」

なるほど、麗子さん、そのために来てくれたんだ。

「プレゼントさせてほしいって言ったんだけど、啓史さん、それは駄目だって言うの。自分が払うから、買うのだけわたしに付き合っってやってほしいって」

ということは、佐原先生に、また余計な出費をさせてしまうことになるんだ。もちろん、麗子さんに払ってもらうなんて、それ以上に申し訳ない。

駅前のデパートの化粧品売場に行き、沙帆子は麗子と相談して、母の芙美子が使っているメーカーのものを購入することにした。すでに数回使用したことがあるから、肌のトラブルの心配もない。

「あの、ありがとうございます」

化粧品の詰められた紙袋を手にし、沙帆子は麗子にお礼を言った。

「わたしは立て替えてるだけよ」

「でも、付き合っただけよ」

「それがとても楽しいのよ。……あの、沙帆子さん、今日のこと、久美子さんには内緒ね」

内緒話のように言われ、沙帆子は「あ……はい」と答えた。

「実はね、啓史さんと話をしたあと、久美子さんを誘おうと思ったの。でも予定だけ聞いたら、今日は習い事らしくてね」

「そうなんですか」

「ええ、習い事よりも、こっちに付き合いたって言い出したかもしれないけど……結局誘わな

かったわ。これからいくらでも、一緒に買い物する機会はあるものね？」  
沙帆子は頷いた。

「それじゃ、次は……」  
次？

「あの、まだ何かあるんですか？」

「そうなの。まだあるのよ」

麗子は楽しげに口にし、沙帆子に向けて意味ありげな笑みを浮かべる。

「い、いつたい、なんなの？」

「えーっと、エスカレーターはこっちね」

ウキウキしている麗子に促され、沙帆子は戸惑いながらついて行った。

「沙帆子さん、どんな雰囲気のものが、好みの？」

エスカレーターで三階へと上がりながら、麗子が聞いてきた。

「あ、あの、何を買うんですか？」

「ああ、ごめんなさい。服よ、服」

「えっ、服を？」

戸惑って沙帆子がそう返すと、麗子にこつと笑う。

「沙帆子さん、ここには来たことある？」

「あっ、はい。母と何度か……」

「ああ、そうなの。ここって、けっこう素敵なブティックが多いわよね？」  
「そうですね」

そう答えたものの、沙帆子が芙美子と入ったことのあるブティックは、リーズナブルな値段のものが置いてある店だけだ。同じフロアには目玉が飛び出そうなほどの高級店もある。じわじわと不安が湧いてくる。麗子がひいきにしている店は、そんな高級ブティックなのではないだろうか？

「まあわたしの好むものは、沙帆子さんには趣味じゃないかもしれないけど……若い子の服を扱っている店も多いから。とにかくこの階を、ひと通り見て回らない？」

これから買うという服は、麗子さんが買ってくれるのかな？

沙帆子は、とても楽しそうにしている麗子を見つめた。

ここは黙ってついて行って、買ってもらうのがいいのかな？ もろちん、新しい服を買ってもらえるのは、とっても嬉しいんだけど……

どうしたものか、と沙帆子がためらっているうちに、麗子はどんどん話を進めていく。

「どう？ 沙帆子さん、入ってみたいお店はある？」

「あっ、は、はい」

返事をして、ブティックだらけのフロアを眺め回したが、迷ってしまふ。

「ねえねえ、沙帆子さん」

手を振りつつ麗子が招く。沙帆子は麗子に歩み寄った。

「あれなんかどうかしら？ あなたにとっても似合いそうだけど……」